

マルセル・デュシャンの自作展示観に関する一試論
—フィラデルフィア美術館アレズバーグコレクションを例に—

慶野結香（東京大学）

マルセル・デュシャン（1887-1968）が、自らの作品展示についてどのように考えていたかを論じた研究は少ない。〈インスタレーション〉の先駆けとも考えられる、1930年代後半から1940年代前半にかけての、シュルレアリスムに関係した展示についての論考は存在するものの、フィラデルフィア美術館のアレズバーグコレクションに関するものは皆無に等しい。本発表は、デュシャンが理想としていた自作展示について、上記コレクションをもとに明らかにする試みである。

フィラデルフィア美術館の上記コレクションは、モダンアートのコレクターで批評家、詩人でもあったウォルター・アレズバーグ（1878-1954）と妻のルイーゼ（1879-1953）が同館に寄贈、1954年から公開されるようになったものである。デュシャンは、美術館側との交渉に際して夫妻の代理人を務めた。そればかりか、寄贈者が亡くなってからは、作品設置において監督を買って出た。展示室は、今日においてなお当時のままにされている。したがって、この展示はデュシャンの意図が反映されたものであると考えることができる。

現存する資料の中で、デュシャンが作品の展示について触れているものとして、1912年9月26日にジャック・ヴィヨン（レーモン・デュシャン、1876-1918）と家族に向けた書簡がある。「つまり、とにかく、美術館という美術館はどれもこれも驚嘆する陳列の数々なのです＝どうしてルーヴル美術館はあんなにへたくそに『並べられている』のでしょうか」。また、デュシャン自身が1949年5月にフィラデルフィア美術館を見学した際には、「難しいのは、従来の美術館コレクションのようにはならないように、提供されるスペースをいかに分割するかでしょう。ギャラティンが自分のコレクションを整理した方法はひじょうに魅力的です」と夫妻に書き送っている。この二つの書簡の間には、確かに37年もの隔りがある。しかしこれらは、美術館の伝統的な作品展示に対してデュシャンが不満を持っていたこと、とりわけルーヴルのグランド・ギャラリーのような長大スペースでの作品展示に対し、批判的であったことを物語っている。

今回は、デュシャンが批判した、20世紀初頭のルーヴルをはじめとする美術館での展示と「従来の美術館コレクション」の展示、また、彼が評価したアルバート・ユージン・ギャラティン（1881-1952）のコレクション展示、フィラデルフィアの上記コレクションの展示の四者を比較することを緒に、デュシャンが理想とした自作展示を浮き彫りにする。彼は、1935年から1941年にかけて制作された《トランクの箱》のように、自作品を一堂に会して見せることに心を割いた。さらに、同じ作家でも関連する作品ごとに区切って展示し、常在的な環境で見られることを理想としていたのではないかと考えられる。